SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol. 127
2026. 12

年間テーマ「今こそ、戦争を未然に防ごう！」



イラスト：石井望神父

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス
TEL/06-6942-1784　FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/https://sinapis.osaka.catholic.jp/

巻頭言

「スカイ・ピープル」が願う平和

今治教会　郷（ごう）　文成（ふみなり）神父

私は、かつて戦争によって甚大な被害を受けた国で生まれ育ちました。幸いなことに終戦後に生まれたため、ベトナム戦争の残酷さを直接経験することはありませんでしたが、学校の歴史の授業を通じてその事実を学ぶ機会がありました。とはいえ、歴史として学ぶことと、実際に体験することの間には大きな隔たりがあります。もし当事者としてその場に居合わせ、罪のない人々が銃口の下で無残に命を奪われる光景を目の当たりにしていたとしたら、その現実は想像を絶するほど悲惨なものだったはずです。

ある時、私は故郷を離れ、日本へ派遣されることになりました。海外に出れば視野や考え方が変わり、戦争やそれに伴う痛み、喪失感について考えなくて済むようになるのではないかと思っていました。しかし、現実はそうではありませんでした。アメリカ、フランス、韓国、中国など、様々な国から来た留学生たちと共に日本語学校で学んでいた時、ベトナム戦争の記憶は、挨拶や何気ない会話の中で何度も話題に上ったのです。「どこの国から来たの？」「ああ、ベトナムですね。あの悲惨な戦争があった国だよね」といった具合に。韓国人のクラスメートは、私にこう言いました。「ベトナム人なんですね、本当にごめんなさい。かつて私たち韓国人は、アメリカの政策に従って軍隊を派遣し、ベトナムと戦いました。そのせいで、ベトナムの状況はさらに悲惨なものになってしまったのです」。また、日本人の方からは、こんなことを尋ねられました。「どうやって日本に来たのですか？ ボートピープルとして来られたのですか？」。私は驚きましたが、その思いがけない質問に微笑みながらこう答えました。「私は『スカイ・ピープル（飛行機）』として、日本に参りましたよ」。

さて、平和とは、誰もが切望しながらも手に入れるのが非常に難しい、尊いものなのかもしれません。かつて戦争を経験した国々も、今まさに戦火の中にある国々も、すべての人々が平和を求めています。そして、日本のように平和を十分に享受しているように見える国であっても、やはり平和は必要です。銃声が聞こえないからといって、それが完全な平和であるとは限りません。銃声は止んでいても、人々の心の中に平和がないという状況があり得るからです。心の中の戦いは、時に銃火器による戦争よりも残酷なものとなり得ます。人々は互いに嫉妬やねたみを抱き、分断を生み、さらには傷つけ合い、命を奪い合うことにまで至ってしまうことさえあるのです。

キリスト教は、平和を築き、隣人を愛することを説く教えです。キリスト教徒であるということは、すなわち「平和の使者」であることを意味します。イエス・キリストが山上で弟子たちに教えられた「八つの幸い」の中にも、「平和を実現する人々は、幸いである」（マタイ 5 章 9 節）と語られた箇所があります。

私たちキリスト者は力を合わせ、平和を築いていかなければなりません。そして、日本社会が常に平和で繁栄し続けるよう努めましょう。また、世界のために、そして戦争によって平和と平安を奪われてしまった国々のために、祈りを捧げましょう。

沖縄からの声

私は誰の隣人になれるのだろうか？

泰（やす） 真実（まこと）

「愛する」とは、どういうことでしょうか。医療や介護の現場で長年、人と向き合ってきましたが、今も答えを探しています。

私は沖縄で、作業療法士として沖縄戦を生き抜いた方々のケアに携わってきました。目の前にいるのは、支援を必要とする方であると同時に、戦火をくぐり、戦後の暮らしを築いてこられた一人の人間です。その人生には、私には知り得ない悲しみや、言葉にならない思いもあるのでしょう。

介護の世界には「パーソン・センタード・ケア」という考え方があります。病気だけでなく、その人の人生や思いを大切にするケアです。今の姿だけで分かったつもりにならず、その人が歩んできた時間に心を寄せる。それは、隣人を愛することにも通じると感じます。

聖書の「善きサマリア人」のたとえでは、強盗に襲われた人を、祭司もレビ人も助けようとせず、通り過ぎます。しかし、ユダヤ人との間に深い隔たりがあったサマリア人は足を止め、傷を手当てし、宿屋に運んで世話をしました。

自分の隣人とは誰かと尋ねた律法の専門家に、イエスは、倒れていた人の隣人になったのは誰かと問い返します。愛する相手の範囲を決めるのではなく、自ら苦しむ人の隣人になる。この問いは、私たちにも向けられています。

けれども、信仰を持つことが、隣人を愛することを保証するわけではありません。ナチス政権下のドイツでは、「帝国教会」を目指すキリスト者たちがナチズムを支持しました。抵抗した人々もいましたが、多くの教会指導者はユダヤ人への迫害に対し沈黙しました。国家への忠誠が信仰と結びつき、隣人の苦しみを見失った歴史です。

その歴史を思うとき、ガザで命を奪われてきた人々の姿が重なります。2025年9月、国連の独立調査委員会は、イスラエル当局と治安部隊によるガザでの行為をジェノサイドと認定しました。

時代も背景も異なる出来事を、同じものとして扱うことはできません。今、信仰が権力を支え、苦しむ人から目をそらすとき、隣人への愛はどこにあるのかと問わずにはいられません。

問われるべきは、ユダヤ人やユダヤ教ではなく、国家の行為と、それを正当化する政治や信仰です。キリスト教シオニズムに基づいてイスラエルを支持するとき、パレスチナの人々の命を視野の外に置いていないか。米国の政策にも同じ問いが必要です。神の名を語ることが、他者の命を軽んじる理由になってはならないと思います。

沖縄に暮らす私も、この問題の外にはいません。沖縄は地上戦で甚大な被害を受け、戦後も基地の重い負担を背負ってきました。一方、沖縄を拠点とする米軍部隊は、中東での軍事作戦にも参加してきました。戦争で傷ついた島が、他の土地を傷つける軍事行動の拠点にもなっているのです。

住民と、戦争を決める政府や軍の責任は同じではありません。それでも、被害を受ける立場にある私たちが、基地を通じて加害の構造にも組み込まれている。その現実を見つめ、どうすれば加害を止められるのかを考えたいのです。

沖縄戦を生き抜いた方々の人生を大切にすることは、今、戦火の中にいる人々の命を大切にすることにつながるはずです。遠くに暮らす人にも、名前があり、家族があり、かけがえのない日々があります。

私自身、理解できない相手に苛立ち、心の中で裁くことがあります。だからこそ、自分の弱さを認め、神の赦しと導きを求めたい。しかし、不完全な自分を理由に、沈黙を選びたくはありません。

見返りを求めず、違いを超えて注がれるアガペの愛。その愛に照らされながら、声を聴き、命を守るためにできることを続けたい。私は誰の隣人になるのか。沖縄戦を生き抜いた方々との出会いを胸に、その問いに応えていきたいと思います。

障がい者部門より



不自由のとなりにある自由

堺教会信徒　　由留木（ゆるき）　安奈（あんな）

昨年 2025 年から「病者・障がい者とともに歩むミサ」に参加し、交流会の企画と運営にも関わらせていただいています。それがきっかけで、堺教会のろう者や手話通訳者とも関わり、手話も教えていただいています。

病者・障がい者と関わるとき、いつも感じるのは健常者とのアンバランスな力関係です。健常者は助ける側、病者や障がい者は助けられる側という関係にいつも縛られてしまう感覚があります。そのため、病者や障がい者と距離を置いてしまうことになります。けれども、本当に私たち健常者はいつも助ける側なのでしょうか。

昨年から「病者・障がい者とともに歩むミサ」に参加するようになって、手話を学び始めると、自由を感じるようになりました。支援する立場ではなく、聴覚に障害のある方と対等な付き合いができることの自由です。ろう者の暮らしや人生に触れることができる自由です。なにより互いに隔たりを感じることなく関われる自由です。それは、手話を少し学ぶだけで、お互いの考えていることや感じたことを知ることができるからだと思います。関わることができる人が少ないのは不自由です。しかし、大きく見えた不自由の壁も思いのほか簡単に越えられました。いつも共にいてくださる神さまのおかげです。

人には、病や障がいの有無にかかわらず、それぞれの生きている世界があります。人と出会い、お互いを知ることで、その人の生きる世界をともに生きることができます。人と関わることは、もちろん苦しいことも辛いこともあります。簡単なことではありません。しかし、それこそが皆が自由にのびのびと暮らせる社会の実現につながると信じています。

ユニバーサルデザイン例

（日本銀行から）



一万円券：左右の中央



五千円券：上下



千円券：左下・右上

アプリ名「Be My Eyes 」- 目が見えない人の目になろう-

支援が必要なときにリアルタイムのビデオ通話を通じて、視覚障がい者とボランティアとをつなげ、視覚的支援を提供するアプリケーション。
アプリをダウンロードし登録するだけで、誰でも無料で利用ができる。

- 登録者数（全世界）視覚障がい者ユーザー91 万人以上、ボランティア 940 万人以上
- 世界 150 カ国以上で利用可能・日本語を含む 180 以上の言語に対応
- 24 時間利用可能（無料）

【連載：ガザの物語】第1回

歴史が伝えるパレスチナ
――民族浄化からジェノサイドに至るまで――

シナピス運営委員　西口（にしぐち）　信幸（のぶゆき）

なぜ、ガザを語り続けるのか

「ガザ戦争は終わった」と語られる今、なぜ私は書き続けるのか。それは、瓦礫のなかから「語ることをやめないで」という声が聞こえてくるからです。その切実な響きは、遠く離れた場所に生きる私たちの信仰や、人間としてのあり方を静かに、しかし鋭く問いかけています。

パレスチナは、イエス・キリストがお生まれになった聖地です。お手元にある聖書の地図を開いてみてください。キリストが生きた時代の地図には、はっきりと「パレスチナ」と記されています。その土地に根を下ろし、宗教の違いを越えて互いに支え合いながら生きてきた人々こそ、聖地に住むことを許されてきたパレスチナ人です。「西洋文明」という名のもとにその聖地を奪い続けるイスラエルと、それを支えている私たち、西洋社会のあり方を、この連載を通して見つめ直したいと思っています。

2023 年 10 月 10 日、テレビに映ったイスラエル軍の隊列、そこに無数の軍用ブルドーザーを見た瞬間、「これは戦争ではない」と直感しました。「ハマスによる奇襲への報復」と語られがちですが、それが正当でも、始まりでもありません。目の前で起きているのは、１世紀近く続いてきたイスラエルによるパレスチナ人の民族浄化と「侵略」の最終段階なのです。

「民族浄化」と「侵略」の始まり

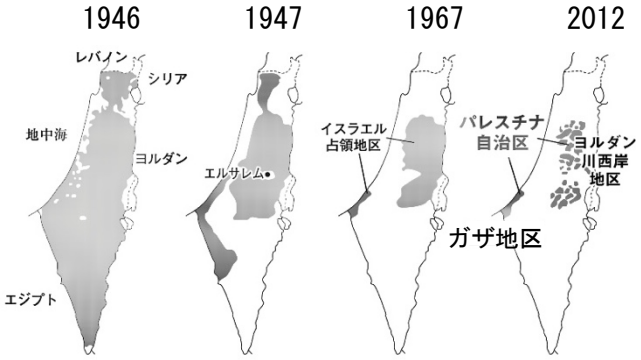
1947 年、シオニストによるアメリカへの働きかけにより、国連はパレスチナ人の存在を無視した分割を決議しました。この理不尽な決定を機に、イスラエルは住民を追放し、街を破壊して、弛まず領土拡大を推し進めてきました。

1948 年の建国に伴う追放で多くの人がガザへ逃れ、ガザ住民の約３分の２が難民です。

1967 年の中東戦争で「占領」が始まります。抵抗が起きるたび経済封鎖と入植が広げられてきました。

「侵略」から「封鎖」へ「生きながらの死」

1993 年のオスロ合意は「和平」の名のもとにパレスチナを分断しました。



イスラエルは「抵抗」を抑え込んだ自治政府を西岸地区に残して入植を進める一方、ガザを分断し孤立させたのです。

2007 年からガザは陸・海・空を完全に封鎖され、人々は「生存限界ギリギリ」に閉じ込められました。平和な「帰還の大行進」のデモも徹底弾圧され、逃げ場のない檻の中で頭上から空爆が降り注ぎました。

１世紀にわたる「侵略」の終焉

2023 年の急襲は、封鎖の解除と収容された同胞の釈放を求める最後の「抵抗」でした。報復として、ガザを襲ったのは徹底的な破壊と大量虐殺、飢餓でした。そして今、「停戦」という言葉の裏で、ガザは新たな封鎖と空爆によってじわじわと狭められ、200 万人近い人々が家族がまだ眠っている瓦礫とゴミ山に囲まれた「生きながらの死」の地獄で「ここで死ぬか、国を捨てるか」の選択を迫られています。

「人道支援」の陰に、強者への加担

「ハマスによる」という言葉で伝えられたガザ戦争、ガザの人々の尊厳を無視するように、「侵略」の終結ではなく「人道的な支援」という点に目を向けさせる空気があります。しかし、「侵略」という不正義に目をつぶり、支援だけを語ることは、弱者の叫びを無視し、強者の暴力に加担することにほかなりません。

なぜ人間に対してこれほど非人道的な仕打ちを続けられるのでしょうか――

次回は、ユダヤ人と、その思想的基盤である「シオニズム」について思いを巡らせます。

その一歩が、誰かの希望に

フリーライター　大元（おおもと）　麻美（あさみ）

そこにあったはずの追悼碑が、突然、消えた。

2024 年1月、群馬県の県立公園「群馬の森」に建てられていた朝鮮人追悼碑が、群馬県の行政代執行によって撤去された。戦時中、日本での過酷な労働で犠牲になった朝鮮人を追悼する碑だったが、ヘイト団体(人種・民族・国籍等の属性を理由に攻撃・排除しようとする組織)からの“言いがかり”をきっかけに、係争したものの、結果として設置の「更新」が認められなかったのだ。判決を受け、関係者や市民団体は、追悼碑の新しい移転先を考えていたのだが、想定外のことが起きた。追悼碑が、「撤去」という名の下で、粉々に壊されてしまったのだ。

ところが、その深い悲しみに、思いがけない光が差し込んだ。岐阜県の情報科学芸術大学院大学の前林（まえばやし）　明次（あきつぐ）教授らが、AR(拡張現実)技術を使い、撤去された碑を再現するアプリを開発したのだ。かつて追悼碑があった場所で、スマホ専用アプリ「AR 朝鮮人追悼碑」（https://sites.google.com/view/gunmanomori）を開いてかざすと、スマホの画面に慰霊碑が立体的に浮かび上がる仕組みになっている。

石やコンクリートは壊すことができても、その土地に込められた人々の祈り、そして土地の記憶までは壊すことができない。そんな思いが伝わってくる。

自分にできる最善を尽くす

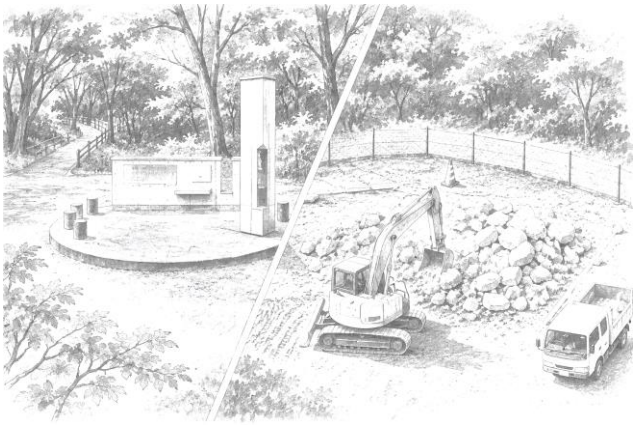
前林教授は、2016 年には、沖縄の米軍基地周辺の騒音を体験できる「OKINAWA NOISE MAP（オキナワノイズマップ）」も制作している。嘉手納や普天間など現地で録音した軍用機などの騒音を、遠く離れた場所でも聴くことができる。(ただし、2026 年現在、ウェブサイトでの運用を終了しています。)

以前、神奈川県のカトリック厚木教会を訪ねた時、頭上を飛ぶ米軍機の轟音に驚いた。隣の人との会話さえ聞こえない。これほどの音の中で暮らすとは、どういうことなのか。その時、沖縄の人々の痛みを、ほんの一滴だけでも体感できたように感じた。

自分が経験したことのない苦しみを想像するのは難しい。私自身、日本各地で起きた朝鮮人の強制労働をその現場で知った時、出会ったことのない人々の苦しみが初めて胸に迫ってきた。

前林教授の取り組みは、他者の痛みに近づくための扉を開くものだと思う。そして、その扉を、自分の専門技術を生かして創造した。

世界には、一人の力では変えられない現実がある。悲しみや怒りを覚えても、何もできない自分に無力さを感じることもある。しかし、自分にできる小さなことは、きっとある。自分の置かれた場所で、自分にできることを精いっぱいする。その小さな一歩が、必ず誰かの希望になると信じている。



左：戦時中、日本で犠牲になった朝鮮人追悼碑
右：追悼碑が撤去され、粉々に。



撤去された碑を再現するアプリを開発した前林明次教授。スマホの画面には慰霊碑が。

「未来への不安」に囚われる

スタディーサークル「ゆるゆる会」参加者　K

先日、シナピスで開催されたスタディーサークルにて、「私のいきづらさ」というテーマで話題提供をする機会をいただきました。私がお話ししたのは、人生全体を通じて、自分の心の奥底にいつも「どよん」と重たく横たわっている違和感についてです。

「人生なんてそんなものだよ」と言われれば、それまでかもしれません。私自身、まだ全く答えが見つかっておらず、きっと一生悩んでいくのだろうなと感じている問いです。

その違和感の正体は、一言でいえば「未来への不安に囚われ、生きている時間のすべてが『未来への準備期間』のようになってしまっている感覚」です。

私たちは小さい頃から、「将来困らないために安定した会社に入ろう」「そのために遊ぶ時間を削って勉強し、良い大学に行こう」と言われて育ちます。大人になってからも、「老後のために無駄遣いをせず貯金しよう」「働けるうちは働いておこう」と備え続けます。

特に今は「人生 100 年時代」と言われます。私が 60 代になる頃には高齢者比率が過去最大にいびつになり、年金や医療・介護サービスもあてにできなくなるかもしれない、インフレでお金の価値も目減りするかもしれない……と、不安の種は尽きません。

そうやっていつも未来の不確実性に備えていると、生きている時間のすべてが「未だ来ない未来のための準備期間」になってしまいます。そして現代の都市生活において、その準備とは、言葉を換えれば「今という時間をお金に変え、未来に備えること」に他なりません。

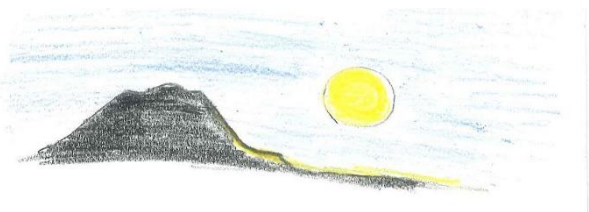
児童文学『モモ』では、「時間貯蓄銀行」からやってきた灰色の男たちが、人々に「将来のために今の時間を節約して貯蓄しろ」「無駄な遊びや雑談をやめて効率よく働き、将来に備えろ」と囁きます。それを信じた人々は、今を楽しむ余裕を失い、心が荒んでいきます。未来のために生きようとするあまり、「いま、ここ」にあるはずの現在を失ってしまうのです。

極端な言い方をすると、「ただつつがなく生活をして、無事に死んでいくこと」自体が人生の目的になってしまっているのではないか――そんな感覚に、私は息苦しさを覚えています。言い換えると「死がよりどころ」になってしまっているような感覚すらあるかもしれません。

なぜ、私たちはこれほどまでにお金と未来の不安に縛られるのでしょうか。 背景にある社会構造に目を向けると、資本主義という仕組みそのものが、人々をバラバラに分断し、孤独な「消費者」にすることで成り立っていることに気づきます。かつては人と人との助け合いで解決してきたやり取りが壊され、現代ではすべてが「お金を払って買う商品」に置き換わりました。生活のすべてが商品化されれば、「お金がないとーミリも生きられない」という強烈な恐怖を抱くようになるのは当然です。

では、一人の力では抗いがたいこの大きな流れの中で、私たちはどうすれば「未来への不安」のために「今」を犠牲にせずに生きられるのでしょうか。

答えはまだ出ません。けれど、普段は蓋をしているこのどよんとした不安を言葉にし、サークルの場で皆さんと分かち合えたこと自体が、私にとって大切な一歩だったように感じています。



ちょっとほっこりおじゃま　笑うページにゃ福来たる!?



ことばを紡ぐ～言葉で遊ぶ

ペンネーム 「旅する象さん」改め **旅象**

令和に入ってことさら効率を重視する風潮が高まっています。いわゆるタイパ・コスパというやつですね。動画視聴においてもタイパ重視でショート動画やおまとめ動画等が人気を博し、ドラマ視聴もネットで 4 倍速再生しているという強者もいるようです。

このコラムのペンネームも「旅する象」ではタイパが悪いので「旅象」にしてみました。

同様に言葉を略して音数を減らして使う傾向も顕著です。アルファベットなども頭文字だけを繋いだものをまるでそれが正式名称のように連呼することで、言葉として定着し、普及しているものも数多く存在します。

SNS なんかも良い例ですね。正式名称は Social Networking Service（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）ですが SNS で定着しています。

同様に AI は Artificial Intelligence（アーティフィシャル・インテリジェンス）で人工の知能ということですね。少し毛色の変わったところでは NHK があります。

これは Nippon Housou Kyoukai（ニッポン・ホウソウ・キョウカイ）の略称で、「なんやねん、全部日本語の頭を取っただけやないか」という大阪人のツッコミが聞こえてきそうです。

皆さんは「ワイシャツ」の正式名称をご存知でしょうか？　旅象も両袖を上に向けた姿が Y の字に似ているから Y シャツが正式なのかと思っていました。調べてみると全然違っていて「ホワイトシャツ」が本来の名前だそうです。縮めてワイシャツということだと。すると柄入りのシャツはワイシャツではないことになります。ガラシャツでしょうね。

SDGs という言葉は欧州を起点として、今では世界中で注目されている造語ですね。正式には Sustainable Development Goals で（サステナブル・デベロップメント・ゴールズ）「持続可能な開発目標」という意味です。国家プロジェクトとして我が国でも政府を挙げて対応を推進していますが、こんなに夏が暑くては働く気が起きません。なんとか気候変動を柔らげることに協力出来ればと思います。そこで旅象は家庭でも貢献可能な SDGs を皆さんに提案します。

S(水道代)、D(電気代)、G(ガス代)を S(節約する)ことです。

天然資源やエネルギー資源を節約してお財布に優しい SDGs に貢献しませんか。

事務局こぼれ話

ビスカルド篤子（あつこ）

11月7日　街をさまようあの人はどこに

土曜の午後、ある人から「泊まるところがない」と電話がかかってきました。私は出先でしたので週明けに来るように言うと「所持金が420円しかないです。寒いです」と、声の主は泣き出しました。そこで私はシナピスの住所を教えて事務所を開けることにしました。

その人は車椅子でした。「今夜は遅いからとにかく休んで、詳しいお話は週明けにしましょう」と言うと、彼女は堰を切ったように喋り出しました。「娘と2人暮らしでした。でも娘は10月20日に癌で死にました」「10月20日？先月の？」

「はい。私、難民申請者ですから自分の国へ帰れません。病院で娘が死んだ時、遺骨を引き取りたかったですが30万円払えと言われ、無縁仏に持って行かれました。娘、死ぬ前に言いました、お母さんといたいから骨一緒にお願いって。できなかった」そういって女性は号泣しました。家を追い出され、女性は居場所を転々とし、所持金がなくなり途方に暮れていたのだそうです。

シナピスのシェルターは段差がありますし、他の人もいるので複雑な疾患を抱える彼女には不向きなのですが、野宿を免れた本人は感謝していました。

安心したのも束の間、夜明け前に「息が苦しい」とその女性から電話がありました。私はすっ飛んで行って救急車を呼びました。彼女にはカビや香料のアレルギーがあり、呼吸困難に陥ったらしいです。シナピスでは環境が合わず、私たちは安宿を探して女性を送り届けました。娘を想い、泣きながらも気丈に車椅子で街をさまよっていたあの人は今、どこでどうしているでしょう。



11月18日　3倍にも5倍にも値上げされた手数料の実態

在留資格更新手数料が跳ね上がって1ヶ月あまり。この日、私は生活保護受給者と一緒に手数料の減免をお願いに入管へ行きました。受付係は申請者の顔と写真を見比べて言いました。「これどうやって撮りました？ 自宅でアプリ使った？加工してるからダメです、機械で撮り直して」「え？加工なんかしていません。僕は毎年このやり方で撮影して許可もらってますよ」「最近、審査が厳しくなりました。顔色が違うからダメです」と突き返されました。男性はその場で固まりました。私は「お金ある？」と尋ねました。「…ない、です。」生保受給者にとって写真代の千円がどれほど高額であるか。私はカンパしました。別れ際、男性は「毎年の手数料6千円でもきつかったのに、1年で3万3千円になったらもう生きていけません」と呟いて入管を去っていきました。

ちょうど彼と入れ違いにやって来た人を連れて、私は再びカウンターに行きました。彼は難民申請者で、一家4人、6ヶ月ごとに更新手続きをしなくてはなりません 前回までは4人分の手数料が2万4千円でしたが、いきなり総額7万2千円を請求されました。「半年の在留資格では定職に就けず、日雇いで生活困窮。また6ヶ月ビザでは生活保護も不可」と減免を訴えました。担当官は「難民申請者の減免措置の条件は生保受給者であること。減免してほしいなら先に生保を取るように」などと説明しました。生保受給者なら救済するが、自力でギリギリの生活をする人には情け容赦ないというわけです。「それおかしいでしょ」と私。「はい、おかしいです。でも決まった制度には逆らえない」と入管。「制度に逆らわなくても減免措置のできる方法を見つけたらよい」と私。「上が決めることなので。」出た、上が決めるの逃げ口上。大嫌いな言葉です。知識と知恵を絞って「上」を動かすのがあなたの役目です。

シナピスホームは 12 月で６周年を迎えました



シナピスホーム（カフェ）
12 月の予定

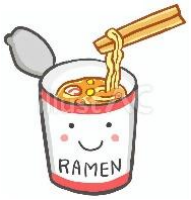
クリスマスパーティー：19 日
★土曜日の 11 時頃～16 時頃
★要予約
☏ 080-8940-8847

カフェ：5、12 日
★土曜日の 13 時頃～16 時頃

シナピスホームは、難民や移住者のためのシェルターで、土曜日にはカフェやランチを開催しています。誰でも参加いただけます。ぜひお越しください。

緊急のお願い

引き続き、
活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いいたします。





特に、お米、カップ麺の
ご寄付をお願いします

シナピス　冬休み

12 月 30 日（火）～1 月 11 日（月・祝）

＊シナピスニュース 次号はクリスマス号
1 月号はお休み。2 月号から再開します。

「ニュースレター配布停止」、
「点訳版の郵送」をご希望の方は
シナピスにご連絡ください。
☎06-6942-1784

あとがき

先月、悲鳴のようなあとがきを記してから１か月。休みの多い 11 月は少しゆっくりと思っていたけれど、甘かったです。難民さんの相談は待ったなし。丁寧に対応できないもどかしさを端っこの私でも感じました。
愛を唱える政治家が勝利したアメリカの中間選挙には驚きました。どこまでアメリカは変わるのか、期待と不安が混じります。今月 18 日の赤根所長の言葉から「希望はここにある」と感じて、クリスマスを迎えたいです。（大）

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動
・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携
◆学習会研修会の企画
◆こども基金
世界・日本のこどもたちへの援助
◆日本カトリック司教協議会との連携
「いのち・平和・人権委員会」に委員を派遣
◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ
◆難民移住移動者支援
難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル
☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22
カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合
JR 森ノ宮駅より　約 1000m
地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より　約 800m
JR 玉造駅より　約 1000m
地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m
●車でお越しの場合
阪神高速１３号東大阪線法円坂出口
法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします
□郵便振替　00960-7-61419
加入者名　カトリック大阪高松大司教区
代表役員　前田万葉

□三井住友銀行　玉造支店　普通　9401958
カトリック大阪高松大司教区　シナピス
代表役員　前田万葉

□オンラインはこちら　➡➡➡